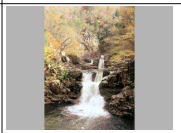
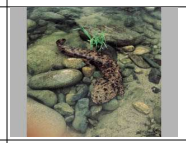
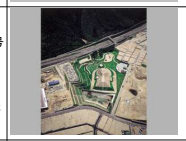
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	特別史跡及び特別名勝	厳島	いつくしま		廿日市市宮島町厳島全島及び宮島町字長浜小名切突角より同町字大西町水晶山北部突角を見通す線内の海面	大12.3.7 （史跡・名勝指定） 昭27.11.22 （特別史跡・特別名勝指定）		約30k㎡	厳島は周囲30km，全島花こう岩からなる。島の最高峰彌山(みせん)は，標高529m，頂上から瀬戸内海を一望できる。 厳島の名は，神をいつきまつる島から出たといわれ，島全体が信仰の対象となっていたと考えられる。社殿が造営された時期は明らかではないが，平安時代（794～1191）には平清盛の庇護のもと，現在の社殿の規模や配置の基本が形作られ，各時代の流れの中で大名などの庇護を受けて継続され今日に伝えられてきている。また，古戦場の地としても知られ，弘治元年（1555）には毛利元就と陶晴賢が覇権を争った厳島合戦の地でもある。 檜皮葺（ひわだぶき），朱塗の社殿が緑の山々に囲まれて，紺碧の海に臨むさまは，まことに自然と人工の美の融合であり，江戸時代には日本三景の一つにあげられた。 平成8年（1996）に原爆ドームとともに世界遺産に登録された。		関連施設：宮島歴史民俗資料館（0829-44-2019）
国	特別史跡	廉塾ならびに菅茶山旧宅	れんじゅくならびにかんちゃざんきゅうたく		福山市神辺町川北字七日市北側　上地域内に介在する水路敷	昭9.1.22 （史跡指定） 昭28.3.31 （特別史跡指定）		2,567.1㎡	菅茶山の私塾「廉塾」と居宅。 菅茶山は，寛延元年（1748），神辺宿に生まれ，教育者・漢詩人・漢学者として知られる。天明元年（1781）に郷里で開塾し，その塾とそれに附属する田地を福山藩に献上し，藩の郷塾となった。公式には神辺学問所と呼ばれたが，一般には廉塾と称した。 敷地内の講堂・寮舎は，桟瓦葺（さんがわらぶき），平屋建て，居宅は，桟瓦葺，2階建てで近世の地方における教育施設として数少ない例である。		関連施設：菅茶山記念館（084-963-1885）
国	特別名勝	三段峡	さんだんきょう		山県郡北広島町・安芸太田町	大14.10.8（名勝指定） 昭28.11.14（特別名勝指定）		267,008㎡	広島県の北西，太田川の上流にある長さ約10kmの長大な峡谷で，その源頭は八幡(やわた)高原に接している。水流は石英斑岩(はんがん)や花こう斑岩の基盤を深く浸食し，数か所で高さ400mにおよぶ大岩壁をおこし，幾多の滝・急流・深淵を形成している。わけても，龍(たつ)の口・黒淵(くろぶち)・猿飛(さるとび)・二段滝・三段滝・龍門(りゅうもん)・三ッ滝などは最もよく知られた所である。この峡谷の植物相は日本西南部の暖帯要素と東北部の亜寒帯要素とが混生しており，ことに春の若葉，秋の紅葉の美しさは他に比類がない。また，峡谷には，ゴギ・ヒラメ(イワナ・ヤマメの類)が生息し，モリアオガエルも見られる。		
国	特別天然記念物	オオサンショウウオ	おおさんしょううお		地域を定めず	昭26.6.9 （天然記念物指定） 昭27.3.29（特別天然記念物指定）			オオサンショウウオ，別名「ハンザキ」は，現在地球上に生存する有尾両生類中最大のもので，生きた化石として世界的に有名である。中部地方から九州に至る山間の渓流に生息しているが，中国地方は特に著名な生息地で，本県では太田川水系・江の川（ごうのかわ）水系・高梁川（たかはしがわ）水系の山間の清流に生息している。オオサンショウウオのうち大きいものは，体長1.5mに達する。性質はいたっておとなしく，水中の岩下やほら穴の中にひそみ，カエルやサワガニなどを補食する。夏，小流の深所にじゅず状の卵塊を産み，幼生は4～5年後に成体となる。		関連施設：広島市安佐動物公園（082-838-1111）
国	特別天然記念物	コウノトリ	こうのとり		地域を定めず	昭28.3.31 （天然記念物指定） 昭31.7.19（特別天然記念物指定）					
国	史跡	御年代古墳	みとしろこふん		三原市本郷町南方	昭8.4.13			沼田川に注ぐ尾原川の奥まった谷の南面する丘陵端に位置する。封土はあまり明瞭でないが，円墳と考えられる。内部主体は花こう岩の切石で築かれた整美な横穴式石室で，後室，前室，羨道からなり，各室に花こう岩製の割抜式家形石棺が納められている。全長10.7m，後室は長さ3.6m，幅1.9m，高さ2.2m，前室は長さ3m，幅2.2m，高さ2.2m，羨道は長さ4.1m，幅1.55m，高さ1.9mである。家形石棺はいずれも縄掛突起がなく，前室の蓋の棟は幅広扁平である。出土遺物としては，金環，金銅製馬具，須恵器などがある。出土遺物や家形石棺などから，7世紀中頃の古墳とみられている。全国的にも注目される古墳である。		
国	史跡	一宮（桜山慈俊挙兵伝説地）	いちのみや（さくらやまこれとしきょへいでんせつち）		福山市新市町宮内字上市　吉備津神社境内	昭9.3.13			城の遺構は桜山という独立丘陵全体に広がっている。周囲の谷部には館跡と思われる平坦地があり，土師質土器が散布している。 元弘元年（1331）の元弘の変の際に，後醍醐天皇による鎌倉幕府討伐の動きに呼応した備後の豪族宮氏の一族桜山四郎入道慈俊（これとし）は，一宮（吉備津神社）の背後の桜山城に拠った。しかし，乱の後は，慈俊は一族郎党とともに翌2年（1332），吉備津神社に放火し自殺したと伝えられる。西方，鳶尾(とびお)山頂に慈俊を祀った社がある。		関連施設：備後一宮吉備津神社宝物館（0847-51-3395）
国	史跡	頼山陽居室 ※頼は旧字	らいさんようきょしつ		広島市中区袋町	昭11.9.3			頼山陽は，江戸時代後期に活躍した漢学者・文人で，幕末の志士たちに多大な影響を与えた歴史書『日本外史』の著者として知られている。安永9年（1780）に大坂で生まれた山陽は，翌天明元年（1781）に広島藩が学問所を創設するのに伴って，父春水（しゅんすい）が儒学者として登用されたため，翌年両親と共に広島に移住する。 寛政元年（1789），父春水は藩から杉ノ木小路（すぎのきしょうじ）（今の袋町・中町の境）に屋敷を拝領する。この屋敷は，現在の頼山陽史跡資料館の敷地にあった。 山陽はここで成長し，寛政9年（1797）には1年間江戸に遊学する。そして，寛政12年（1800）に脱藩して京都に行くが，すぐに連れ戻され，屋敷の離れに幽閉された。この離れが，現在の頼山陽居室である（当時の居室は原爆で焼失し，昭和33年［1958］に復元された）。 5年間幽閉された山陽は，その間ひたすら文筆活動に専念し，歴史書『日本外史』の草稿をまとめる。幽閉が解けると，山陽は神辺（福山市）や京都に移り住み，様々な著述に励む。そして，天保3年（1832）に53歳で亡くなる。 頼山陽史跡資料館は，このような生涯を送った頼山陽や広島の近世文化に関する様々な資料を展示している。		関連施設：頼山陽史跡資料館（広島県立歴史博物館分館、082-298-5051）
国	史跡	安芸国分寺跡	あきこくぶんじあと		東広島市西条町吉行	昭11.9.3 昭52.6.29（追加指定，名称変更） 平14.3.19（追加指定）			西条盆地の東北部，北に山をおい南に盆地の低平地を望む緩やかな傾斜地に位置する。 昭和7年（1932）寺域の南西に存在した聖武天皇の玉歯を埋めたと伝えられる塚状の地点を発掘したところ，基壇と礎石群が検出され，塔跡が明瞭になり，昭和11年（1936）に安芸国分寺塔跡として史跡に指定された。 昭和44年（1969）以降平成12年（2000）まで12次の発掘調査が行われ，奈良時代の遺構は，門，金堂，講堂，僧坊が南北の伽藍中軸線上に配置されており，北辺では築地と溝があったと推定される。 なお，南方5kmの三永水源地北畔には，国分寺と同様な瓦を出土する窯跡があり，この付近で国分寺の瓦を生産したと考えられる。		

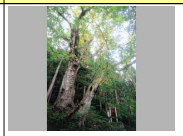
国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	史跡	毛利氏城跡 多治比猿掛城跡・郡山城跡	もうりししろあと たじひさるかけじょうあと こおりやまじょうあと		安芸高田市吉田町	昭15.8.30 昭63.2.16（追加指定，名称変更）			安芸の国人領主から中国地方有数の戦国大名になった毛利元就に関係する遺跡群である。毛利氏が本拠とした郡山城跡や，元就が幼少の頃過ごしたと伝えられる多治比猿掛城跡からなる。 郡山城跡は，海抜400mの郡山山頂に本丸を設け，その南方に二の丸・三の丸をかまえ，四方に延びる尾根に沿って郭が配されている。山中，山麓には，毛利氏歴代の墓所をはじめ常栄寺，洞春寺（とうしゅんじ），満願寺などの菩提寺の跡がある。これらの諸寺は，毛利氏にともない広島，山口へと移転した。 多治比猿掛城跡は，元就が大永3年（1523）27歳で郡山城に移るまで居住した。城跡は，平地との比高140m，天険によった要害で，本丸・二の丸・三の丸をはじめ数段の郭がある。		関連施設：安芸高田歴史民俗資料館（0826-42-0070）
国	史跡	広島城跡	ひろしまじょうあと		広島市中区基町	昭28.3.31			戦国時代（16世紀）に，郡山城を本拠として，中国9か国を平定した毛利氏は，天正17年（1589）輝元（てるもと）の代に，太田川の三角州に大規模な築城をはじめ，天正19年（1591）に入城した。これが広島城である。毛利氏は在城9年ばかりで，関が原の戦いの後に防長に追われたが，その後も，福島氏・浅野氏の居城として城下町が経営され，今日の広島市発展の基となった。 広島城の旧来の建築は原爆によりすべて焼失し，現在の天守閣は昭和33年（1958）建築の鉄筋コンクリート造である。		関連施設：広島城（082-221-7512）
国	史跡	小早川氏城跡 高山城跡・新高山城跡・三原城跡	こばやかわししろあと たかやまじょうあと にいたかやまじょうあと みはらじょうあと		三原市高坂町・本郷町・城町・館町	昭32.12.11 昭55.7.12（追加指定，一部解除） 平10.12.8（追加指定，名称変更）			中世安芸南部の国人領主・小早川氏に関わる一連の城跡である。小早川氏の本拠であった高山城跡や，高山城から16世紀半ば頃に移った新高山城跡，中世末期（16世紀後半）に築城された近世城郭である三原城跡からなる。 高山城：標高190mの山上は広大で，本丸・北の丸・太鼓の丸・千畳敷や裏木戸にあたる犬通しの石垣などがある。 新高山城跡：高山城と沼田川を挟んでほぼ等高に位置し，小早川隆景が天正年間（1573～1591）に三原城を築いて移るまで本拠とした。山上には，本丸・東の丸・中の丸・西の丸などの郭や各所に石垣や土塁が残っている。東の丸と中の丸の間の低地の井戸郭には大小六つの大井戸跡が，山腹には菩提寺跡がある。 三原城跡：小早川隆景が築いたもので海に向って弁入りを開き，城郭兼軍港としての機能を備えている。三原浦の南の海上にあった大島・小島を基盤として築造されたもので，既に天文年間（1532～1554）の末には三原要害が築かれ，永禄10年（1567）には本丸・二の丸・三の丸・舟入りなどが整備され，天正元年（1573）には隆景はこの城に前進して指揮をとっている。小早川氏の移封後も福島氏，浅野氏の支城となった。		関連施設：三原市歴史民俗資料館（0848-62-5595）
国	史跡	福山城跡	ふくやまじょうあと		福山市三之丸町，松山町	昭39.2.7			元和5年（1619），福島正則の移封の後をうけた水野勝成（みずのかつなり）は，はじめ神辺（かんなべ）城にいたが，まもなく福山に築城をはじめ，元和8年（1622）入城した。水野氏の後嗣が絶えた後も，松平氏・阿部氏の居城とされたが，明治維新に至って建築物の多くは取り除かれた。城は丘陵の先端部を占め，北部背面を切通しとし，三方に堀や郭（くるわ）を設けていたが，現在は外郭はほとんど市街地化されている。しかし本丸，二ノ丸はよく規模をとどめ，天守閣は空襲で焼失したが，昭和41年（1966）復元，地階を有する天守台は，江戸時代初期（17世紀初め）の天守閣の好例とされている。そのほか本丸と二の丸の石垣や，伏見城松の丸から移建された三層櫓や鉄筋御門などが残っている。		関連施設：福山城博物館（084-922-2117）
国	史跡	寄倉岩陰遺跡	よせくらいわかげいせき		庄原市東城町帝釈未渡字寄倉	昭44.4.12			帝釈峡の石灰岩地帯では，昭和36年（1961）の調査以降石器時代の岩陰・洞窟遺跡が多数分布することが明らかとなった。なかでも寄倉岩陰遺跡は，帝釈始終地区の東端，帝釈川左岸に位置し，西面した石灰岩の岩陰にそって，長さ30m，幅15m以上の規模をなしている。縄文時代から鎌倉時代（1192～1332）にわたる遺物を出土しているが，とくに縄文時代（紀元前約1万年前～紀元前300年頃）の文化層が厚く，縄文時代早期から晩期にいたる各種の遺物が，きちんとした層序をなして出土しており，中四国地方の縄文土器編年の基準となる重要な遺跡である。縄文時代後期末から晩期にかけての文化層では，約50体にのぼる人骨が集積された状態で検出されている。		関連施設：帝釈峡博物展示施設「時悠館」（08477-6-0161）
国	史跡	宮の前廃寺跡	みやのまえはいじあと		福山市蔵王町宮の前	昭44.5.27			福山市の北東，かって深津湾岸の南面する丘陵の中腹に位置し，現在は八幡神社の境内となっている。古くから塔の心礎が注目されていたが，戦後の数次にわたる調査によって，東に塔跡，西に金堂跡が検出された。その他の遺構は，立地からみると存在しない可能性がつよい。塔跡は一辺12.6mの正方形で，南辺は[84a6]積み（せんづみ）化粧，北辺は乱石積みを交える。柱間は6.66m（2.24尺）で，五重塔か三重塔かは不明である。金堂跡は東西25.3m，南北15.5mで，南辺は[84a6]積み化粧，北辺は乱石積みを交える。奈良時代前期末から後期（8世紀）の瓦類のほか，金堂跡から[84a6]仏，塔跡から「紀臣和古女」をはじめとする人名をヘラ描きした文字瓦の出土が注目される。		
国	史跡	浄楽寺・七ツ塚古墳群	じょうらくじ・ななつづかこふんぐん		三次市高杉町	昭47.10.12 昭50.2.7 （追加指定）			三次盆地の南東，馬洗川左岸の沖積地をのぞむ比高30～50mの丘陵上に分布する古墳群で，中国山地における群集墳の典型である。浄楽寺古墳群は丘陵の下手北西半に116基が分布し，径45m，高さ6mの円墳を中心に径10～20mの円墳が丘陵上に群在する。円墳のほか帆立貝式古墳2基，方墳4基を含む。七ツ塚古墳群は南東上手の丘陵頂部付近に，60基が分布する。全長27mの前方後円墳や径31.2m，高さ3.8mの円墳を含むが，その規模は前者より小さい。埋葬施設並びに出土遺物からみると，古墳時代中期～後期（5～6世紀）の古式の群集墳である。 なお，この両古墳群一帯約30haの地域は，広島県立みよし風土記の丘として環境整備されている。		関連施設：広島県立歴史民俗資料館（0824-66-2881）
国	史跡	花園遺跡	はなぞのいせき		三次市十日市町字大久保	昭53.1.27			若宮古墳などの所在する丘陵のほぼ中央に位置し，標高190mの頂部から北の傾斜面にかけて，方形台状の墳墓並びに方形周溝墓多数が検出され，そのうち台状墓3基が指定保存されている。第1号台状墓は，この墳墓群の最高所にあり，東西32m，南北18mの長方形をなし，北辺は石材を高さ1.3mにわたって貼っている。第2号台状墓は第1号の北西，第3号台状墓は第1号の北，第2号の東に接して分布するが，その規模は小さい。各墳墓には，多数の土壙，箱式石棺，石蓋土壙の埋葬施設がある。遺物としては，管玉，弥生土器，土師器があり，墳墓の主体は弥生時代後半（1～3世紀）から古墳時代の初頭（3世紀後半）にあり，古墳成立直前の様相を示す墳墓群である。		
国	史跡	横見廃寺跡	よこみはいじあと		三原市本郷町下北方字漆原窪	昭53.5.22			梨和川が沼田川に合流する地域の西北山麓端に位置し，北に山をおい南は低地に連続する。発掘調査で，講堂，塔，築地などの遺構が検出され，寺域は東西約100m，南北80m前後とみられる，講堂跡は寺域の東寄りに位置し，南北28.8m，東西19.2mの規模で，基壇化粧は平瓦をたて並べている。この基壇の南には回廊がとりつく。講堂の西北方には塔の遺構が検出され，西向きの特異な伽藍配置となる。瓦類は山田寺式単弁軒丸瓦や忍冬唐草文軒丸瓦などが多数出土している。遺構の下層から弥生時代終末（3世紀前半）の土器類が，多量に出土している。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	史跡	矢谷古墳	やだにこふん		三次市東酒屋町字松ケ迫	昭54.3.13			矢谷古墳は,三次盆地南縁の標高230mの丘陵上にあり,三次工業団地造成事業に伴い昭和52～53年度(1977～1978)に行われた発掘調査により検出された。弥生時代中期末から古墳出現前まで(1～3世紀)中国地方山間部及び山陰・北陸地域にかけて盛行する四隅突出型墳丘墓を2基合わせたような形態をもち,全長18.5mである。埋葬施設は木棺7基・箱形石棺2基・土壙など計11基があり,後方部中央にはこの墳丘墓の中心主体と考えられる最も大きい木棺が存在する。ここから出土した特殊器台や特殊壺などの遺物は重要文化財に指定されている。古墳出現前における地域社会のあり方,吉備と出雲との交流,関係を示す重要な墳墓である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
国	史跡	三ツ城古墳	みつじょうこふん		東広島市西条町御薗宇	昭57.6.3			西条盆地の南縁の丘陵端部に,前方部を北に向けて所在する前方後円墳である。全長約92m,前方部幅約67m,高さ約11m,後円部径約62m,高さ約13mで,後円部の背後に径25mの円墳1基(第2号古墳)第2号古墳の周構内に径8×4mの墳丘をもつ第3号古墳がある。 第1号古墳の墳丘は葺石(ふきいし)で覆われ,埴輪を3段にわたって巡らし,東西に造出しがある。後円部頂部には椁(かく)を有する箱式石棺2基,箱式石棺1基の埋葬施設があり,鏡,鉄器(刀・剣・鏃(ぞく)など),銅釧(どうくしろ),櫛,玉類(勾玉・管玉・棗玉(なつめだま)など)が出土した。埴輪には円筒のほか家形・短甲・鞆などがあり,造出しから土師器,須恵器類が出土した。古墳時代中期(5世紀)に築かれた古墳と考えられ,安芸国最大の規模からすると,安芸国を統一する首長の出現を示すものと言える。		関連施設: 東広島市立中央図書館ー三ツ城ガイダンスコーナー(082-422-9449)
国	史跡	寺町廃寺跡	てらまちはいじあと		(寺跡)三次市向江田町 (窯跡)三次市和知町大鳴	昭59.5.25			三次盆地東端の四周を丘陵に囲まれた場所の,南面する丘陵上に位置する。昭和54～57年度(1979～1982)までの発掘調査により東側に塔跡(約11m四方の[84a6](せん)積基壇),西側に金堂跡(東西15.7m,南北13.4m,[84a6]積基壇),奥側に講堂跡(東西25.1m,南北14.7m,[84a6]積基壇)の法起寺式伽藍配置で7世紀中葉の寺院跡である。出土遺物には,単弁,複弁の蓮華文軒丸瓦,[84a6],鴟尾(しび),小仏頭(しょうぶっとう)などが出土しているが,特に軒丸瓦の瓦当面下端には,いわゆる「水切り」と称せられる削り出しが認められる。『日本霊異記』にみえる備後三谿寺に比定され,郡の大領の祖による建立,百済の僧弘済の招請など,地方寺院には珍しい建立の由来並びに朝鮮との直接的な関連を示す。なお,寺院跡の北西約1.2kmには寺町廃寺跡への瓦を供給した大当瓦窯跡が確認されている。		
国	史跡	吉川氏城館跡 駿河丸城跡・小倉山城跡・日山城跡・吉川元春館跡・西禅寺跡・万徳院跡・洞仙寺跡・常仙寺跡・松本屋敷跡	きっかわしじょうかんあと するがまるじょうあと おぐらやまじょうあと ひのやまじょうあと きっかわもとはるやかたあと さいぜんじあと まんとくいんあと とうせんじあと じょうせんじあと まつもとやしきあと		山県郡北広島町	昭61.8.28 平9.9.2(追加指定)			中世安芸北部の国人領主吉川氏に関わる城跡,館跡,寺院跡である。 駿河丸城跡は,吉川経高が正和2年(1313)に築城したといわれ,低丘陵を利用した城跡である。 小倉山城跡は,15世紀前半に築かれ,1545年ころ興経が日山城を築くまで吉川氏の本拠として使われていたもので,切土・盛土による典型的な中世山城である。 日山城跡は,1545年ころ興経が築城したと考えられており,高所山頂にある近世的山城である。 吉川元春館跡は,1583年冬,家督を元長に譲った元春が着工したもので,正面に石垣があり,トイレ・風呂屋・台所などの建物跡や庭園,井戸などの施設が見つかっている。また,背後に元春・元長の墓所がある。 西禅寺跡は,吉川氏の菩提寺であり,小倉山城跡の前面にある。 万徳院跡は,1575年ころ,吉川元長が数多くの神仏の加護を得るために建立した「諸宗兼学」の寺院で,元長の死(1587年)後,その菩提寺として大改修された。正面に長さ80mの石垣があり,本堂・庫裏・風呂屋などの建物跡,庭園や上水道などの跡が見つかっている。また,広家の妻容光院の墓所もある。 洞仙寺跡は吉川氏の菩提寺である。 常仙寺跡は,吉川興経の菩提寺で,日山城跡の東麓,大手筋にある。 松本屋敷跡は,吉川元春の妻の屋敷跡と伝承される。正面には長さ70mの石垣・門が残る。		関連施設:戦国の庭歴史館(0826-83-1785)
国	史跡	朝鮮通信使遺跡 鞆福禅寺境内	ちょうせんつうしんししせきともふくぜんじけいだい		福山市鞆町鞆字古城跡	平6.1011			鎖国時代の日本(徳川幕府)にとって朝鮮(李氏朝鮮)は正式な外交のある唯一対等な国家であり,将軍の代替わりのたびに通信使とよばれる使節が訪れた。通信使の経路はほぼ一定しており,鞆には計12回の通信使が宿泊している。福禅寺は弁天島・仙酔島に対する景勝の地にあり,鞆に寄港した朝鮮の正使・副使・従事などの宿所に当てられた。正徳元年(1711)李邦彦の「日東第一形勝」の額をはじめ,寛延元年(1748)洪景海の書する「対潮楼」の書幅など多くの資料が残る。 対潮楼は元禄年間(1688～1703)の創建と言われ,梁間六間,桁行六間半,単層入母屋造り,本瓦葺きの建物である。		
国	史跡	原爆ドーム (旧広島県産業奨励館)	げんばくどーむ(きゅうひろしまけんさんぎょうしょうれいかん)		広島市中区大手町1丁目	平7.6.27			原爆ドームは,昭和20年(1945)まで広島県産業奨励館と呼ばれていた。大正3年(1914)細工町の元安橋の東河畔に,広島県物産陳列館として建築され,大正4年(1915)に開館した。 館の業務は,県内の物産販路開拓や生産品の陳列及び委託販売等であった。しかし,戦争が激しくなると,産業奨励館の展示も徐々に縮小され,昭和19年(1944)3月31日には館の業務は廃止された。 戦局も悪化した昭和20年(1945)の8月6日,原子爆弾が産業奨励館の東方約150m,高度約580m前後の地点で爆発した。産業奨励館も爆風と熱線を浴びて大破,全焼したが,建物本体は奇跡的に倒壊を免れた。当時,この建物内にいた約30名の職員は全員即死した。 戦後,原爆ドームは原爆の惨禍とともに平和を訴えるシンボルとして保存され,昭和42年(1967)と平成元年(1989)には保存修理が行われている。 平成8年(1996)には,厳島神社とともに世界遺産に登録された。		関連施設: 広島平和記念資料館(082-241-4004)
国	史跡	中小田古墳群	なかおだこふんぐん		広島市安佐北区口田町,口田南町,口田南3丁目	平8.11.11			中小田古墳群は,太田川下流左岸の太田川に沿って南から北にのびる標高60～130mの丘陵に存在する12基からなる古墳群である。 昭和36年(1961)に三角縁神獣鏡や甲冑類などが発見され,昭和54年(1979)に保存を目的とする発掘調査が実施され,前方後円墳(第1号)1基,帆立貝式古墳(第4号)1基,円墳8基が確認され,その後さらに円墳2基が発見された。 第1号古墳の竪穴式石室からは,三角縁神獣鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう)の外,獣帯鏡,車輪石,玉類,鉄斧等が出土しており,古墳時代前期後半(4世紀後半)の築造と思われる。第2号古墳の竪穴式石室からは,素文鏡・衝角付冑(しょうかくつきかぶと)・鉄剣・蛇行剣形鉄製品・太刀・刀子・鎌・斧等が出土しており,中期前半(5世紀前半)の築造と思われる。 古墳群は,調査されたこの2基の副葬品等から見ると,いずれも太田川下流域の首長墓の中では中核的な位置を占めており,同地域の沖積平野と内海交通を掌握していたと推測される。		
国	史跡	鏡山城跡	かがみやまじょうあと		東広島市鏡山二丁目	平10.1.14			室町・戦国時代(15～16世紀)には,西条盆地と黒瀬川の下流域一帯は,安芸国東西条(とうさいじょう)と呼ばれ,当時,瀬戸内海地域西半に大きな勢力をもっていた防長の大名大内氏の直轄領であった。鏡山城は,この一帯を支配する拠点となっていた。 鏡山築城の時期は不明であるが,15世紀中ごろにはできていたものと思われる。戦国時代後半になると城は大内氏と尼子氏の争奪の場となったが,ついに大永3年(1523)に毛利元就の軍勢を先鋒とする尼子経久のため陥落した。この後大内氏はこの地方の本拠を西方の槌山(つちやま)城に移す。 現在,城跡には,馬返し,下のだば,中のだば,御殿場など削平された郭(くるわ)や井戸が残り,また西南麓には鏡見寺跡が残っている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	史跡	陣山墳墓群	じんやまふんぼぐん		三次市四拾貫町，向江田町	平12.12.20			陣山遺跡は，丘陵尾根線から東側斜面にかけて築造された1～5号墓の5基の四隅突出型墳丘墓からなる。1～5号墓の南北延長は約40m，東西幅は約8mである。墓域は1号墓と2～5号墓との2つに大きく分かれ，1号墓は2号墓の盛土下に造られるとともに他の墳墓と主軸を異にしている。一方，2～5号墓は墓域を設定することにより同一区画内に企画性をもって規則正しく配列されている。 どの墳墓からもこの地方の弥生時代中期後葉（1世紀）の指標土器である塩町式土器（しおまちしきどき）が出土していることから，限られた期間にこれらの墳墓が造られたものと考えられる。 四隅突出型墳丘墓は，弥生時代中期後葉から古墳出現前（3世紀中頃）にかけて，中国山間部，山陰，北陸地域に分布するもので，古墳の出現を考える上で重要な手がかりになると考えられている。陣山遺跡の例は初源的で，この地域における首長の動向や四隅突出型墳丘墓の起源を探る上で貴重である。		
国	史跡	二子塚古墳	ふたごづかこふん		福山市駅家町新山	平21.7.23			二子塚古墳は，広島県の東部，備後地域に所在する標高50m前後の低丘陵上に所在する前方後円墳である。 発掘調査の結果，墳丘長68m，墳丘の周辺には幅1.6～4m，深さ1.8m程度の周溝が全周し，それを含めた総長は73.4mになり，備後地域を代表する大規模前方後円墳であることが明らかとなった。 埋葬施設は，前方部と後円部に横穴式石室が1基ずつある。後円部のものは両袖式で，全長14.9mと吉備有数の規模を誇る。石棺は播磨の竜山石製の組み合わせ式石棺であった。 副葬品は，須恵器・鉄製武器・馬具とともに，大刀に伴う金銅製双龍環頭柄頭（そうりゅうかんとうつかがしら）は珍しい意匠で注目される。副葬品の内容から，古墳の築造は6世紀末から7世紀初頭ごろと考えられる。 備前・備中地域においては，古墳時代前・中期に巨大な前方後円墳が築造されたのに対し，備後地域では，この古墳が突如として出現した。玄室内の石棺は，地元で採れる浪形石（なみがたいし）ではなく，畿内地域の前方後円墳などに採用された竜山石を用い，石室構造や出土遺物も畿内地域と関係があったことを示す。 このように，二子塚古墳は，7世紀前後のヤマト政権と吉備との政治状況を知ることができる点で，極めて重要な古墳である。		
国	史跡	甲立古墳	こうたちこふん		安芸高田市甲田町上甲立	平28.3.1			甲立古墳は，広島県の山間部安芸高田市東部の江の川（可愛川(えのかわ)）とそれにつながるいくつかの河川の合流点に所在する。江の川は，日本海側の石見地域とつながる，中国地方最大の河川である。 本古墳は墳長77．5mの前方後円墳で，葺(ふき)石(いし)が墳丘斜面のほぼ全面に施されている。後円部平坦面では墓坑1基を検出し，電気探査によると竪穴式石室や礫槨(れきかく)などの埋葬施設であると考えられる。墳丘からは円筒埴輪と器(き)財(ざい)形(がた)埴輪(はにわ)が出土した。後円部平坦面には墳丘に沿って円筒埴輪が樹立し，その内側には5個体の家形埴輪が一列に配置されていた。埴輪の特徴から古墳時代前期末，4世紀後半に築造されたと考えられる。 古墳は均整の取れた墳形，緻密に施された葺石，丁寧かつ精巧に製作された家形埴輪を有し，築造に畿内地域の勢力が深くかかわっていたことが考えられる。4世紀後半は大和政権が朝鮮半島と対外交流において関係を深めた時期にあたり，本古墳が瀬戸内海と日本海を結ぶ内陸部に築造されたことによって，大和政権の対外政策のあり方を知ることができる。さらに，後円部での埴輪群は当時の葬送儀礼のあり方を知ることもできる。古墳時代前期の政治や交通そして葬送儀礼のあり方を知る上で重要である。		関連施設：安芸高田歴史民俗資料館（0826-42-0070）
国	史跡	備後国府跡	びんごこくふあと		府中市元町	平28.10.3 令和元.10.16（追加指定）			古代備後国の国の行政施設である国府の跡。府中市一帯は旧葦田郡に属し，10世紀の漢語辞書『和名類聚抄』に「国府在り」と記述されている。昭和42年度から行われてきた発掘調査によって，国府を構成する多様な遺跡が確認され，8～12世紀の国府の成立から衰退までの変遷など，古代国家の地方支配の実態を知る上で極めて重要な知見が得られた。平成28年にツジ地区と金龍寺東地区の2地区が，令和元年に伝吉田寺地区が指定されている。 ツジ地区は8世紀を中心に方一町（約109m四方）の区画溝に囲まれて大型掘立柱建物群が建ち並び，大型建物は9世紀に区画溝を失った以降も10世紀末まで存続した。出土遺物は，国府系瓦（国が建設した行政施設共通の文様が施された，軒先を飾る瓦），腰帯具（ようたいぐ，古代官人の正装の帯に縫い付けた，留具や装飾具），硯や備後国内では他に例を見ない量の国産・輸入品の高級な陶磁器が，12世紀まで連綿と出土しており，文書行政や饗応などに用いられた，備後国内で最も格式高い施設の一つである。 金龍寺東地区は，7世紀に天智天皇が創建したとされる川原寺（奈良県明日香村所在）の中金堂に匹敵する規模で，国府系瓦が用いられている極めて格式の高い礎石建物跡や苑池（池を伴う庭園）遺構が検出されている。国府における宗教政策あるいは饗宴のための施設と推定され，国府の多様な構成要素の一つである。 伝吉田寺地区では，伝吉田寺跡（広島県史跡）に関連する遺構（8～12世紀の門跡と考えられる建物跡等）が確認された。伝吉田寺は，7世紀後半に創建され備後国府における宗教行事を担ったと考えられている。当該寺院の存続期間や構造の移り変わりの一端が判明するとともに，備後国府の実態を知る新たな知見が加わった。		関連施設：府中市歴史民俗資料館（0847-43-4646）
国	史跡	下岡田官衙遺跡	しもおかだかんがいせき		安芸郡府中町石井城二丁目	令和3.3.26			下岡田官衙遺跡は広島湾北東部の山塊から南西に派生する丘陵の先端，標高10～60mの南西向きの緩斜面地に立地する。昭和38年度から昭和41年度まで行われた遺跡中心部の内容確認を目的とした発掘調査で2棟の瓦葺礎石建物や井戸などが検出されるとともに，瓦，土師器，須恵器，木簡，文書函蓋，木製品などが出土した。その立地や出土遺物，周辺の地名などから，早くから安芸駅家である可能性が指摘されてきた。 平成28年度から令和元年度まで府中町教育委員会によって行われた発掘調査やこれまでの調査成果の再検討の結果，遺跡は7世紀後半に漆を用いた作業に関わる施設として成立し，8世紀中ごろに計画的に配置された2棟の瓦葺礎石建物を中心とした施設となり，9世紀前半に廃絶したことが明らかになった。山陽道沿線では8世紀中葉以降に，瓦葺の駅家が整備されることが知られているが，本遺跡の施設もこれに合致し，規模や出土遺物からして寺院や国府，郡家関係施設とは考えにくく，駅家の可能性が極めて高いことが改めて確認された。 山陽道駅路に沿った陸海交通の要衝に立地する安芸駅家の可能性が高い官衙遺跡であり，山陽道沿線における官衙の展開を知る上でも重要な遺跡である。		関連施設：府中町歴史民俗資料館（082-286-3260）
国	史跡	佐田谷・佐田峠墳墓群	さただに・さただおふんぼぐん		庄原市宮内町・高町	令和3.10.11			佐田谷・佐田峠墳墓群は，弥生時代中期末から後期前葉（紀元前1世紀～1世紀頃）にかけて築造された，四隅突出型墳丘墓3基，方形台状墓4基，方形周溝墓1基の8基からなる墳墓群である。西城川左岸の標高約300mの低丘陵頂部，およそ東西250mの範囲に3群にまとまる形で造られている。 弥生時代中期末には古相の四隅突出型墳丘墓を含む多様な形態の墳墓が，墓坑の掘削・埋葬と墳丘の盛土を繰り返すことで徐々に構築されている。また，墓坑は並列に配置され，主に在地系の土器が周溝に据えられる。その後，弥生時代後期初頭以降には墳形は方形台状墓が主となり，墳丘の構築後に墳頂部から墓坑が掘り込まれるようになる。また，大型墓坑を中心に，周囲に他の墓坑が配される墳墓が現れるなど，明確な中心埋葬がみられるようになる。それに加えて吉備系の土器が使用され，墓坑上に土器が供献されるようになる。 日本列島において首長墓が出現する弥生時代中期から後期にかけて，墳丘築造と埋葬の関係，埋葬施設の配置，墳墓祭祀の変遷が同一の墳墓群の中で明らかになった事例であり，地域間関係の展開と有力者集団内の構造の変化の実態を知る上で重要である。		関連施設：庄原市歴史民俗資料館（庄原市田園文化センター内、0824-72-1159）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	史跡	広島原爆遺跡 旧燃料会館（現・平和記念公園レストハウス） 旧日本銀行広島支店 旧本川国民学校校舎（現・本川小学校平和資料館） 旧袋町国民学校校舎（現・袋町小学校平和資料館） 多聞院鐘楼 旧中国軍管区司令部防空作戦室	ひろしまげんばくいせき		広島市中区中島町，袋町、本川町，基町，南区比治山町	令和6.2.21			広島原爆遺跡は、第二次世界大戦の末期である昭和20年（1945）8月6日に広島にアメリカ軍により投下された原子爆弾の被害の実相を伝える遺跡である。爆心地から1．4kmまでは人体に致命的な熱傷を与え，2km以内では大半の建物が全壊全焼した。原爆による被害は，爆風、熱線、放射線が挙げられ、同年中に約14万人が死亡したと推定されている。 旧燃料会館（現・平和記念公園レストハウス）は、地階には火災痕である煤のある天井や、爆風の影響で押し上げられたと推定される天井スラブが残る。旧日本銀行広島支店は爆風による地階の扉の蝶番の損傷や、2階の木製の腰壁には窓ガラスの破片が突き刺さった痕などが残る。旧本川国民学校校舎（現・本川小学校平和資料館）は炭化した木煉瓦や焼け焦げた戸枠・配電盤が残る。旧袋町国民学校校舎（現・袋町小学校平和資料館）は被爆後臨時教護所となった際に記された伝言や炭化した木煉瓦が残る。多聞院鐘楼は爆風によって損傷した天井や梁をそのまま残す。旧中国軍管区司令部防空作戦室は、当時勤労動員されていた高等女学校の生徒が、電話により四国軍管区司令部と福山の部隊に被爆直後に被害を伝えた場所である。 広島原爆遺跡は第二次世界大戦末期における原爆投下の歴史的事実と、人類史上初めて使用された核兵器の被害、戦争の非情さを如実に伝える遺跡である。		関連施設：広島平和記念資料館（082-241-4004）
国	史跡	西条酒蔵群 白牡丹酒造延宝蔵 賀茂鶴酒造一号蔵 旧広島県醸造試験場（賀茂泉酒造） 福美人酒造大黒蔵	さいじょうさかぐらぐん		東広島市西条本町，西条上市町，西条末広町	令和6.2.21			西条酒蔵群は、西条盆地北部に所在する旧西国街道の宿場町西条の、近世に始まり近代に発展し、現在も続く全国屈指の酒蔵群である。西条では、文化2年（1805）には島家が酒造を行っていたことが記録に見え、明治20年代末に行われた三浦仙三郎による軟水醸造法の確立、明治27年（1894）の山陽鉄道の広島駅までの延伸、木村 酒造場におけるいち早い動力式精米機の使用などにより、明治40年（1907）には広島の酒が全国で認められるに至っていた。 指定物件は、西条で最初期より酒造を行ってきた島家の白牡丹酒造の延宝3年（1675）建設とされる延宝蔵、木村酒造場の後継である賀茂鶴酒造の明治初期建設の一号蔵、昭和4年（1929）建設の旧広島県醸造試験場、当時の西條町長の発起で造られた西條酒造株式会社の後継会社である福美人酒造の、大正14年（1925）に建設された西条で最大の酒蔵である大黒蔵である。 西条酒蔵群は、旧西国街道沿いの町家の背後に建てられた小規模な酒蔵から、近代以降町並みの背後の農地を利用した大規模な酒蔵へと発展していく様子を理解することができ、また、近代酒造業の拡大の変遷を追うことのできる歴史的に重要な酒蔵群である。		
国	名勝	帝釈川の谷 （帝釈峡）	たいしゃくかわのたに（たいしゃくきょう）		庄原市東城町，神石郡神石高原町	大12.3.7			高梁（たかはし）川の上流にある石灰岩峡谷で，浸食によって諸所に天然橋や洞窟が形成されている。わけても峡谷に架せられた雄橋（おんばし）（長さ65m，幅12m，高さ30m）は，天然橋としては世界有数のものである。帝釈峡にある多くの石灰岩洞窟のうち，白雲洞は鍾乳石（しょうにゅうせき）や石筍（せきじゅん）が林立して壮観である。この地一帯を形成する石灰岩には，紡錘（ぼうすい）虫・サンゴ・ウミユリなどの化石が含まれており，断魚渓（だんぎょけい）付近では，サンゴの化石があざやかに観察される。なお，峡谷には，アルカリ性土壌のみに生ずるイチョウシダ・ツメレンゲ・イワシデなどの石灰岩植物が多い。		関連施設：帝釈峡博物展示施設「時悠館」（08477-6-0161）
国	名勝	鞆公園	ともこうえん		福山市鞆町後地，沼隈町能登原	大14.10.8 昭3.11.30（追加指定） 昭26.6.9（追加指定）			沼隈半島の南東，水呑（みのみ）から阿伏兎（あぶと）にいたる鞆断層崖の東側には，仙酔島（せんすいじま）を中心としてつつじ島・皇后島・弁天島など，大小の島々が散在する。この地は，瀬戸内海の中でもとりわけ美しく，江戸時代，鞆港に寄泊した朝鮮通信使・李邦彦は，「日東第一形勝」と賞賛している。 沼隈半島の南端は，険しい海食崖となり，阿伏兎岬の奇勝を生んでいる。この岬の前面，田島との間にある幅500mの阿伏兎瀬戸は，尾道港に通じる交通の要衝であるが，潮流が激しく，岬の突端に位置する磐台寺（ばんだいじ）観音堂（重要文化財）が海上に生活する人々の信仰を集めている。ここからの備後灘（びんごなだ）の展望は壮大で，西方芸予の多島海風景もすばらしい。		
国	名勝	縮景園	しゅっけいえん		広島市中区上幟町外京橋川河川敷内	昭15.7.12			江戸時代初めの元和6年（1620），初代広島藩主浅野長晟（ながあきら）の命を受けた家老・上田宗箇（そうこ）が藩主別邸の庭として築庭したもので，泉邸・御泉水と称せられた。以来，歴代の藩主が修飾を加え，特に天明年間（1781～1788），9代重晟（しげあきら）は京都の庭園師・清水七郎右衛門に大いに改修を行わせ，景観を整えた。 庭園は中央の濯櫻（たくえい）池に十数個の島を点在させ，北東側に迎暉峯（げいきほう）などの築山があり，池畔や樹林の中に茶室や亭館を配してそれらを連絡する園路によって庭を回遊できるように造られている。この種の庭は回遊式庭園と呼ばれ，江戸時代の諸大名の大庭園の多くはこれに属する。 昭和20年（1945）原子爆弾により崩壊したが，その後復元，整備された。		
国	名勝	浄土寺庭園	じょうどじていえん		尾道市東久保町	昭52.5.7			浄土寺境内の西北部，方丈（ほうじょう）と庫裡（くり）とに東南を囲われた築山泉水（せんすい）庭である。山畔を利用して築山を構え，前面白砂敷との間に細い池を設ける。築山一帯に多数の石を配し，中央滝の石組には特に意匠を凝らしてある。方丈と書院から飛石を打ち並べ，築山の両側から築山背後の茶室・露滴庵（ろてきあん）の露地に続いている。ソテツやツツジ等の刈込物が多い。 寺蔵の古絵図によって本庭は文化3年（1806）長谷川千柳によって作庭され，いわゆる「行の築庭」の様式によったものであることが知られる。また，この絵図によって作庭当初の地割と石組が良く保存されていることが明らかである。		関連施設：浄土寺宝物館（0848-37-2361）
国	名勝	吉川元春館跡庭園	きっかわもとはるやかたあとていえん		山県郡北広島町海応寺	平14.9.20			安土桃山時代（16世紀後半），吉川元春（1530～1586）の隠居館の庭園。垂直の石組護岸と扁平な石敷池底による極めて人工的な池庭。建物北縁が池護岸，池の北に築山，その東に滝組。築山頂部に立石を据え，三尊石風石組を配する。遺構の残りは極めて良好。 中世末期の庭園として朝倉館跡庭園と並び秀逸である。		関連施設：戦国の庭歴史館（0826-83-1785）
国	名勝	旧万徳院庭園	きゅうまんとくいんていえん		広島県山県郡北広島町舞綱	平14.9.20			吉川元長（1548～1587）が安土桃山時代（16世紀後半）に建立した万徳院本堂の西と北に所在する庭園。西庭園では旧谷川の地形を生かした大振りな池と中島を造成し，中島を船に見立てている。北庭園は本堂8畳間に付属した小規模な坪庭で，小滝と小池がある。 戦国大名による寺院付属庭園として貴重である。		関連施設：万徳院跡ガイダンスホール「青松」（0826-83-0126）

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	名勝	平和記念公園	へいわきねんこうえん		広島市中区大手町，中島町	平19.2.6			太田川（ほんかわ本川）がもとやすがわ元安川と分岐する三角州の最上流部に位置し，原爆死没者の慰霊と世界恒久平和を祈念して開設された都市公園である。 昭和24年（1949）の広島平和記念都市建設法の制定に伴い，平和記念施設事業として記念公園が整備されることとなり，競技設計の公募に応募した145点の中から1等に入選した丹下健三ほかによる作品に基づき，昭和25年（1950）に着工，同29年（1954）に完成した。 これと並行して，昭和27年（1952）には原爆死没者慰霊碑（公式名：広島平和都市記念碑）が整備され，昭和30年（1955）には広島　平和記念資料館　などが完成した。 　公園南端　の平和大通りから、広島平和記念資料館のピロティと原爆死没者慰霊碑　のアーチを経て原爆ドームへと延びる中軸線上の通視は、原爆死没者　の慰霊と世界恒久平和への願　いを確実に表現するものであり、視覚と　慰霊の行為を関係づけようとする丹下の優れた空間意匠及び構成の意　図が読み取れる。その東西に広がる樹林の区域及び河川区域を含め、公　園とその周辺の環境が持つ風致景観は優秀であり、慰霊と平和希求の象　徴的な場として芸術上・観賞上の価値及び公園史上の価値は高い。		関連施設：広島平和記念資料館（082-241-4004）
国	天然記念物	ナメクジウオ生息地	なめくじうおせいそくち		三原市幸崎町有竜島南西能地堆	昭3.3.24			ナメクジウオは扁平な紡錘形をしており，体色は淡桃色で，体長5cmぐらいである。原索動物門の頭索綱に属し，脊椎動物の原始形態をなすものとして，動物進化・発生学上貴重な研究資料とされている。この類は世界に約30種が知られているが，わが国では広く太平洋岸に生息する。そのうちでも瀬戸内海，三原水道の入口の有竜島（うりゅうとう）の南西に続く長さ約400mの砂浜は生息地である。ここは干潮時に一部もしくは全部を露出する海砂の浜からなり，ナメクジウオはその砂中に潜入，消息しているが，近時，生息数が激減している。		
国	天然記念物	彌山原始林	みせんげんしりん		廿日市市宮島町御山	昭4.12.7			宮島の主峰をなす彌山の北斜面は，古来厳島神社の社叢（しゃそう）として特別な保護を受けてきたので，原始林的様相を保っている。彌山の北山麓には，モミの大木が多く，頂上付近にはツガ林が発達しており，クロバイやウラジロガシなどの常緑広葉樹林も著しい。林内には，アカマツ・シキミ・アセビ・シロダモ・ヒサカキ・アラカシ・イヌガシ・サカキなどが繁茂し，ミヤジマンモツ・ミヤジマカエデなど固有の植物も生育している。本土に多いツリ・クスギ・アベマキ類がこの島ではほとんど見られないことも分布上興味深い。この原始林は，わが国の暖・温帯林の代表的なものとして価値が大きいばかりでなく，宮島の景観にとっても重要な要素となっている。		
国	天然記念物	スナメリクジラ廻游海面	すなめりくじらかいゆうかいめん		竹原市竹原町阿波島南端白鼻岩を中心とする半径1,500mの円内海面	昭5.11.19			スナメリクジラは，イルカの一種で，体長は1.5mくらいで，くちばしは丸く，背びれがない。インド洋，太平洋，東シナ海に分布している。瀬戸内海では例年1月下旬頃，竹原市阿波(あわ)島の近海に現われ，繁殖した後，5月頃に離散する。		関連施設：宮島水族館（0829-44-2010）
国	天然記念物	アビ渡来群游海面	あびとらいぐんゆうかいめん		呉市豊浜町斎島宇葭ケ鼻353番地より斎島北端イカリの鼻を経て同字地獄谷甲214番地に至る地先海面にしてイカリの鼻を中心とする半径900mの円内区域 大浜字馬乗大崎下島南端馬乗の鼻を中心とする半径600mの円内海面 同字雀西南端を中心とする半径500mの円内海面 豊島字鴨瀬北端及び二窓南端を中心とする半径それぞれ600mの円内海	昭6.2.20			アビは，この地方でイカリ鳥という。アラスカ・シベリヤなどの北方に夏繁殖し，冬南下する渡り鳥である。そのころになると日本全国の海上に現れるが瀬戸内海にはことに多く見られる。竹原市の西南方海上豊島付近には毎年2月から4・5月にかけて数百羽が渡来する。イカリ網代漁は，アビに追われて海中深く潜入するイカナゴを好餌（こうじ）として群集するタイやスズキを釣るもので，アビの群游する海面を囲んで数十隻の漁船が円陣を組んで乗り回す，この特異な漁法は，古来祝島・二窓・馬乗・すずめ瀬の近海の急流うずを巻く所で行われていたが，昭和60年代前半に消滅した。なお，アビは広島県鳥である。		
国	天然記念物	沼田西のエヒメアヤメ自生南限地帯	ぬたにしのえひめあやめじせいなんげんちたい		三原市沼田西町松江	昭10.12.24 昭32.7.31（名称変更）			エヒメアヤメは高さ15～30cmの小型のアヤメ属の多年草で，毎年4月下旬頃にスミレ色の美しい花を開く。もともとエヒメアヤメは中国東北部・朝鮮半島に分布する植物として知られていたが，日本では愛媛県北条市腰折山で最初に発見されたのでこの名がつけられた。その後，佐賀・大分・宮崎・山口・広島・岡山の各県にも自生することが明らかになった。沼田西町の山林内の自生地は数ヵ所あるが，天然記念物に指定されている地域はその一ヵ所である。いずれもアカマツ林の疎林地で，陽当りのよい場所に多く見られる傾向がある。		
国	天然記念物	忠海八幡神社社叢	ただのうみはちまんじんじゃしゃそう		竹原市忠海町字鳥居町	昭11.9.3			モッコクは，アジアの暖地固有の常緑広葉樹である。この神社の境内には総数約60本を数えるモッコクが群生し，そのうち目通り幹囲1.20mを越えるものが10本以上もある。いずれも樹勢は旺盛で樹高20m～30mに達し，群落生態学上一つの単位として貴重なモッコクの群叢を形成する。ちなみに最大のものは目通り幹囲1.90mで，モッコクでは県内有数の巨樹である。		
国	天然記念物	烏骨鶏	うこっけい		地域を定めず	昭17.7.21			烏骨鶏は，全身の羽毛の小羽枝がはなればなれになっていて羽面を示さず，羽枝が柔らかで長く，絹糸のようである。それで絹羽鶏という名もある。頭部に桑実状の冠をいただき，毛冠がその後方に直立している。性質は温順で就巣性が強い。羽毛については黒色種のほかに白色種と褐色種の二種がある。烏骨鶏の原産地はアジアであるが，それがインドシナ半島か中国大陸かについては定説がない。 　烏骨鶏が日本に渡来したのは江戸時代の寛永年間（1624～1644）と言われる。烏骨鶏は本県にはかなり飼育されていて，オコッケイ，オゴッケイ，オケラ，オケラコウなどと呼ばれている。		

国／県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
国	天然記念物	熊野の大トチ	くまののおおとち		庄原市西城町熊野	昭33.2.6			トチの木は，わが国の山地に分布する落葉高木で，かなりの大木となる。時には人家に植えられたり，街路樹に使用されることもある。 本樹は，大羽川の左岸の川岸斜面に立っており，根元は空洞となっているが樹勢は盛んである。根回り周囲12.20m，樹高約30mで，根元から2本の支幹（目通り幹囲9.60m，5.50m）に分れているが，全国有数の巨樹である。		
国	天然記念物	比婆山のブナ純林	ひばやまのぶなじゅんりん		庄原市西城町油木，比和町三河内	昭35.7.15			ブナ林は日本の冷・温帯に発達する代表的森林である。中国地方のブナ林は，海抜約900m以上に発達すると言われているが，山地が一般に低く，早くから開発されたので，背梁部の高く険しい山々でないとブナ純林を見ることができない。広島県の北東，島根県境にある比婆山は標高1,264m，伊那美尊（いざなみのみこと）の墳墓の伝説をもつ御陵地（県史跡）で，頂上部から山腹一帯約23haの区域にブナ林が茂っている。頂上付近には老大木も少なくなく，純林としての林相がよく整い，わが国西部におけるブナ林として有数のものである。		
国	天然記念物	船佐・山内逆断層帯	ふなさ・やまのうちぎゃくだんそうたい		三次市畠敷町二本松 庄原市山内町深田山 安芸高田市高宮町佐々部	昭36.5.6			船佐・山内の逆断層帯は，第四紀（約200万年前～現代）の地殻変動を示すものである。 船佐の逆断層帯は，高宮町佐々部（ささべ）植谷（うえたに）を中心として東西2kmにわたって点々と露頭（ろとう）があり，基盤岩の中生代の白亜紀（約1億4300万年前～約6500万年前）花こう岩が新第三紀中新世（約2500万年前～約520万年前）の備北層群（びほくそうぐん），およびその上に不整合にのる第四紀初期の甲立礫層（こうたちれきそう）の上に，北に30度傾斜する低角度で衝上している。 山内の逆断層帯は，三次盆地北辺から庄原市山内町まで16kmにわたって山麓に連続して追跡され，古い基盤のひん岩とその上に堆積した第三紀中新世備北層群の基底礫岩層が上位の備北層群砂岩層上に押し上げられている。 この逆断層が第四紀以後の新しい断層で，中国山地や瀬戸内海形成史上，貴重な資料である。		
国	天然記念物	久井・矢野の岩海	くい・やののがんかい		三原市久井町吉田字船岩尻 府中市上下町矢野	昭39.6.27			久井町吉田の岩海は宇根山（標高698.8m）山塊の南側の山腹（標高480～570m）にある。傾斜の緩い3条の谷間に沿い，花こう閃緑岩の巨大な岩礫が長く帯状に連続累積し実に見事である。これは，塊状の基盤が気温変化などのため，その節理やヒビにそって剥離・破砕され，風化の進展とともに土壌化した部分は流れ去り，岩礫化したものが残ったものである。 上下町矢野の岩海は矢野温泉の南方約1kmの一渓谷底（標高約450m）にある。閃雲花こう岩の巨大岩礫が重なり，谷底を埋め，その厚さは7m以上，延長70mに及ぶ。巨大な岩礫の間には，ミカドキクガシラコウモリが多く生息し，コウモリ岩として知られている。谷頭・稜線付近の基盤花こう岩がかつて崩壊転落し，風化の進展により礫化し土壌が洗い去られ巨大岩礫の残留累積したものである。		
国	天然記念物	押ケ垰断層帯	おしがたおだんそうたい		山県郡安芸太田町字山瀬，上城 廿日市市吉和	昭40.7.1			顕著な断層崖の浸食が進めば，断層線（帯）の部分が早く低くなり，これを境に断層崖下に小さく分離した丘陵（断層丘陵）ができる。 押ヶ峠断層帯は，太田川上流の戸河内町立岩ダムから坂根地区に至る2kmの間，左岸に位置し，線状に並ぶ四個の断層丘陵（ケルンパット）が存在する。これらはそれぞれ「タオ・ニゴヤ」などと呼ばれている。断層帯はこれら断層丘陵の西側鞍部（ケルンコル）を結ぶ線に沿って走り，さらに北東及び南西方向に延長20kmに及ぶ地質学・地形学上顕著な断層である。 安芸西部山地の谷間に見られるこのような典型的断層地形は，わが国では他に類例少なく，学術上価値が高い。		
国	天然記念物	ヤマネ	やまね		地域を定めず	昭50.6.26			ヤマネは一見リスに似ており，頭胴長約8cm，尾は約5cmで四肢は短い。体の背面は淡いバラ色またはコルク色で，毛の基部は灰黒色である。眼のまわりは黒茶色で，尾は体と同色であるが金色の光沢がある。分布は本州・四国・九州の山岳地帯に広く分布しているが，その分布域は年々狭められている。ヤマネは，一属一種の日本特産動物であり，学術上貴重な種である。		
国	天然記念物	雄橋	おんばし		庄原市東城町帝釈，帝釈未渡	昭62.5.12			雄橋は,名勝帝釈川の谷（帝釈峡）にかかる石灰岩の天然橋である。全長約90m,幅約18m,厚さ約24m,河床よりの高さ約40mであり,鍾乳洞の一部が残されたものと考えられる。橋背に小径があり,かつて東城から庄原へ通じる旧街道となっていた。規模も雄大で学術上貴重な存在である。		
国	天然記念物	大朝のテングシデ群落	おおあさのてんぐしでぐんらく		山県郡北広島町田原	平12.9.6			テングシデは枝條の屈曲が著しいイヌシデの変種である。指定地内にある89本のうち最大のものは胸高幹囲が約3m，樹高14mである。近年の調査により，突然変異による形質が遺伝的に固定されたもので，種子による世代交代が行われていることが明らかにされた。テングシデに対する畏敬の想いや，木を損なう行為に対するタブーなどから，この地で大切に保護され現在まで残されてきたものである。 このような特異な遺伝形質を持った樹木の群落が残されたことは，学術的にも貴重である。		